

赤いはりねずみ 目次 第46号 2018

巻頭言	もうひとつの子守歌	佐藤元哉	5
論文	ブラームスの《ピアノ協奏曲第1番》研究 —作品の創作過程とパレストリーナ受容の可能性に関する考察—	西原 稔	6
No.150 春例会	講演記録 中井恒仁「ブラームスを語る」 中井恒仁／西原 稔		34
夏季レクチャーコンサート	ブラームスの《交響曲第1番》	羽木光彦	57
秋季準例会 朝日カチャーセンター	ブラームスとバロック音楽	山田豊明	58
随想	ブラームスとホルン	江川知典	59
随想	忘れられない言葉 ブラームスの交響曲第4番とヴォルフ	飯田 操	69
連載	ブラームス録音小史 第9回 LPレコード<モノラル編2 米 RCA ビクター>	山田豊明	74
海外通信	オランダの教育 モンテッソーリ幼児教育	金丸葉子	86
活動記録	2018 年度	重成 瞳	89
後援・推薦	コンサート2018年～2019年	羽木光彦	91
英文目次			97
編集後記			98
入会案内			
扉絵	ハンブルグ・フィルハーモニーに月桂冠を贈られて、交響曲 No. 1 を故郷で初演するブラームス (1878.1.18 45 歳)	染川英輔 作	
口絵写真	45周年記念No.150 春例会／夏季レクチャーコンサート／ 秋季準例会／No.151 冬例会	羽木光彦	

ブラームスの《ピアノ協奏曲第1番》研究

—作品の創作過程とパレストリーナ受容の可能性に関する考察—

A Study in the Piano concerto No.1 of Johannes Brahms

—Considerations on the Composing Process and the Possibility of
the Reception of Palestrina—

西原 稔

Minoru Nishihara

1853年9月30日にシューマン家を訪問したブラームスは、交響曲の創作が自身のもっとも重い課題であることを深く認識することになる。ブラームスの登場に対するシューマンの驚きは、ブラームスを紹介した彼の批評記事によく示されている。そうした期待を受けて1857年から58年にかけて2曲の管弦楽作品を完成する。《セレナード第1番》(作品11)と《ピアノ協奏曲第1番》(作品15)である。これら2曲とも、ブラームスの交響曲の創作の構想を踏んでいた点でも共通性をもつ。ただし、《セレナード第1番》は、ハイドンやベートーヴェンの作品から主題を借用して作曲され、全体に古典派の音楽の受容の側面が強いのに対して、《ピアノ協奏曲第1番》は彼の独創的な創作の試みが直接的な形で表現されている点が異なる。

ピアノ協奏曲という形で完成されることになったこの作品は、ブラームスのオーケストレーションの学習過程とブラームス独自の個性的な響きをきわめてストレートに表現している点で注目される。この作品は2台のピアノのためのソナタとして1854年の早い時期に成立した。このピアノ協奏曲の作曲過程におけるヨアヒムによるとくにオーケストレーションに関する指導と添削は、その後のブラームスの管弦楽作品の書法の確立においてきわめて大きな意味をもつ。二人の間の往復書簡を中心に作品の形成過程を追っていきたい。

第1章 《ピアノ協奏曲第1番》の構想

1854年4月(おそらく9日)に、オットー・グリムがヨアヒムに宛てた書簡の中で、グリムは「ブラームスはもう2台のピアノのための3つの楽章を書き上げた。(注1)」と記しており、ブラームスはピアノ・ソナタ第3番の完成後に2台のピアノのためのソナタに着手し、早い筆で3つの楽章を完成させている。そして同じ年の6月19日、ブラームスは友人のヨーゼフ・ヨアヒム Joseph Joachim 宛の書簡で、この3楽章の2台ピアノのためのソナタをクララ・シューマンの前で演奏していることを述べている。この書簡はこのように記している。「私は私の二短調のソナタは長く寝かしておきたい。このソナタの最初の3楽章はシューマン夫人としばしば演奏している。本当のことを言えば、私はこの2台のピアノのための作品には満足していない。(注2)」

この手紙から、この作品はおそらく4楽章の構想で作曲されたものの、3楽章までしか完成されていなかったことと、2台ピアノ用には満足していないことが読み取れる。シューマ

日本ブラームス協会 45 周年記念
講演「中井恒仁 ブラームスを語る」
Lecture of Prof.Nobuhito Nakai "My view on Brahms"



司会 西原 稔

2018年5月27日(日) 2 p.m. 於 ヤマハ銀座店 6F サロン

西原 改めてご紹介させていただきたいと思います。先ほど素晴らしいピアノを演奏していただきました中井恒仁先生です。どうぞよろしくお願いたします。

中井 きょうはありがとうございます。(拍手)

西原 間近で、ピアノソナタの3番という曲を初めて聴きました。ステージだとある距離がありますよね。まさにこのホールが全部ピアノになって響いたような、私はそう感じました。

先生と、曲目をどうしましょうかとお話しさせていただきました。ピアノソナタ3番と作品119を演奏したいということで、つまり、本当にごく初期の21歳の時と、最後のピアノ曲ですよ。先生は何か、3番と後期の作品に対する思い入れのようなものがありましたらお話いただけますか。

中井 そうですね。今日のコンサートに声をかけていただいて、ブラームスで1時間ぐらいでどういう曲にしようかな、と。ブラームスは、初期にソナタを3曲書いて、それからバリエーションをずっと書いてその後には小品集を書いてと、時期に

ブラームスとホルン

J.Brahms and Horn

江川知典

Tomonori Egawa

はじめに

「ブラームスとホルン」というテーマはずっと以前から関心の対象であったが、いつか自分なりに整理してみたいと思っていた。

ブラームスの作品を聴いていると、この作曲家とホルンという楽器の強い結びつきを感じる。ブラームスはホルンの使い方が上手い、ブラームスは大事な部分でホルンに重要な役割を与え活躍させる、などとよく言われるが、それはどうしてなのかという点について探ってみることにしたい。音楽学的なアプローチは専門家の方にお任せするとして、ホルンを愛する一音楽愛好家の視点で話を進めて行きたい。

アマオケでホルンを吹いていた頃、下吹きであるが、交響曲第1番と第2番の演奏に加わった経験がある。ブラームスの作品をホルン奏者として演奏していると、確かに奏者として「美味しい」部分が沢山あることが分かる。ブラームスはどのようにホルンという楽器を重視したのであろうか。そしてホルンがどれだけ重要な役割を担っているのか、また作品を魅力的にしているのかを、いくつかの例を挙げて紹介してみたい。

1. ホルンとの出会い

ブラームスとホルンの出会いといっても、十分な資料がないということもあるが、例えばクラリネットのミュールフェルトとのような、インパクトのある出会いがあったということではなさそうである。ホルンに関しては寧ろ、父親が町のホルン奏者であったことで幼い頃から身近にホルンの音を聴いて馴染んでいたということ、しかもその音色に深い愛着を持っていたということが大きく影響しているものと思われる。しかし、父親がホルン奏者といっても、さほどの名手ではなかったようである。ブラームスの父ヨーハン・ヤーコブは、最終的にはハンブルクフィルハーモニーのコントラバス奏者となったが、若い頃、シュタットプファイファー(町楽師)の元で5年間ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、フルート、ホルンを学び様々な楽

忘れられない言葉 ブラームスの交響曲第4番とヴォルフ

Unforgettable words by Hugo Wolf about Brahms' symphony No.4

飯田 操

Misao Iida

はじめに

私が中学、高校生の頃（1965年～1971年）はNHKのAM放送でもクラシックの番組がかなり放送されていた。その内、月曜から金曜の毎夕方6時15分から45分間、大宮真琴先生（「レコード芸術」誌で交響曲等の月評を執筆されていた）の案内で名曲の紹介が中心の「家庭音楽会」という番組が放送されていて、私はほとんど欠かさず聴いていた。番組は曜日によってテーマが決まっていて、木曜日は交響曲の日で、長い曲では何回かに分けて全曲が放送された。その中でブラームスの交響曲が順次放送され、交響曲第4番になった日の大宮先生の解説が、私にとって忘れられないものになった。大宮先生は、反ブラームスのフーゴ・ヴォルフがブラームスの第4交響曲の演奏会を聴きに来て、この時も批判するために来たのに「くやしいが、気に入った」と言って帰ったというエピソードを紹介された。ヴォルフの、批判する相手の作品であっても良かったものは認める態度に中学生ながら感動し、自分もこのようでありたいと思ったのを覚えている。それから現在に至るまで心に残る言葉として留まっていたのである。

しかし、その後ブラームスの第4交響曲のレコード、コンサート、放送の解説でこのことに触れているものに出会うことはなかった。大宮先生の著書でも名曲解説のようなものも見当たらないし、他に音楽書などでヴォルフがブラームスに対して極めて批判的であったという記述に出会うたびに、この記憶が果たして正しかったのかどうかと思うようになってしまった。しかし、私にとっては忘れられない言葉であり、なんとか確かめたいとの思いは続いていたのが本稿を書くきっかけである。

ブラームス録音小史 第9回

“Short history of Brahms Music Recording”vol.9

LPレコード<モノラル編 2 RCA ビクター>

山田豊明

Toyoaki Yamada

1. 12インチ LP 対 7インチ EP

それまでのアコースティック録音(ラッパ吹き込み)からマイクロフォンを使用した電気録音方式に変わり、1925年に初めて電気録音によるレコードを発売したのが米ビクターであったことは録音小史の SP レコード編で紹介した。ここでいう米ビクターとは 1901 年創立のビクター・トーキングマシン・カンパニーのことだが、この会社を 1929 年に RCA(Radio Corporation of America)が買収したことによって誕生したレコード会社が RCA レコード、つまり RCA ビクター(以下 RCA)だ。

RCA 設立後の 1930 年代から 60 年代にかけて、RCA と LP のオリジネーターであるコロムビアとはアメリカの二大レコード会社としてライバル関係にあった。しかしその後は紆余曲折を経て、両社ともソニー・ミュージックエンタテインメントに統合されている。RCA がすでに BMG の傘下に入っていた 2008 年、その BMG もソニーに買収され完全子会社となり、社名としての RCA レコードは消滅した。その後、イギリスの EMI やオランダのフィリップスも同じような経過をたどり消滅した。これらのことは音楽業界内のこととはいえ、抗うことのできない時代のうねりを感じさせずにはおかない出来事だった。

時代はさかのぼる。LP レコードの開発において遅れをとった RCA が LP の制作を始めたのは米コロムビアの LP 発売から約 1 年半後、すなわちほとんどのレコード会社が LP の発売に踏み切った後の 1950 年 1 月だ。LP 市場への参入について腰が重かったのにはそれなりの理由があった。RCA はコロムビアとは異なる方法で長時間連続再生の道を模索していたからだ。RCA の LP を紹介する前にまずそのことについて触れておこう。

レコード世代にとって懐かしいものの一つに EP 盤(Extendet Playing)がある。毎分 45 回転による直径 7 インチ(17 cm)の小さなレコードだ。LP 同様塩化ビニール

オランダの教育モンテッソーリ幼児教育

Our experience at the Montessori School in Amsterdam

金丸葉子

Yoko Kanamaru

早いもので息子も4歳になり、オランダで学校が始まりました。オランダでは4歳から義務教育が始まります。日本でも将棋の藤井くんの活躍でモンテッソーリ教育に着眼する教育熱心な親御さんが増えてきました。

以下、日本ブラームス協会の羽木会長から頂きました藤井7段の情報を交えながら、モンテッソーリ教育のご紹介をしたいと思います。

藤井聡太7段は3歳の時に雪の聖母幼稚園（愛知県瀬戸市）に入園した。同園では子どもの感性や自発性を尊重する「モンテッソーリ教育」を取り入れていた。5つの領域からなるたくさんの教具の中から子どもは自分で選び、大きさの異なるブロックを順に積み上げたり、教具に内在する法則を理解して活動する。

モンテッソーリ教育を受けた子どもたちを追跡調査した相良さんは藤井の戦いぶりを注意深く観察している。「あの集中力と直感力。追い詰められたときでも状況を見渡し、臨機応変に対応する力。調査した子どもたちと共通する特徴が多いですね」。

幼児期にモンテッソーリ教育を受けた人の中からは、米マイクロソフトの創業者ビル・ゲイツ氏、アマゾンの創設者ジェフ・ベゾス氏らユニークな人々が生まれている。ITの世界で天才と呼ばれる彼らは世界に革命的な変化をもたらした。デビューから無敗のまま29連勝という新記録を達成した14歳。将棋界の未来を「天才」が背負っている。

音楽の話題から少しずれてしまいますが、今回の海外通信は、このオランダでのモンテッソーリ教育についてご紹介します。

日本は6歳から義務教育が始まり、小学校に入学しますが、オランダは4歳から。